

倉庫をめぐる差役について

——明清時代における徭役と行政の関係（中）——

伍 躍

二、斗級と庫子の徴発

- 1) 斗級と庫子の配置
- 2) 斗級と庫子の徴発標準
- 3) 明代中期以後の状況

三、斗級と庫子の職掌

- 1) 錢糧財物の収納と放出
- 2) 錢糧財物の保管

（以上本号）

四、斗級と庫子の負担

- 1) 定額外の要求
- 2) 定額外の要求を生ずる原因

おわりに

（以上第13号）

二、斗級と庫子の徴発

1) 斗級と庫子の配置

斗級と庫子は倉庫で務める差役夫である。これら倉庫関係差役夫の徴発は、少なくとも唐代にはすでに存在していた。唐代には倉庫に門夫という差役夫が配置されたが、これについては、当時、次の規定が設けられていた。「各州県では防人（おそらく地方治安維持を担当する者である）を設けていないところには、城門及び倉庫門にそれぞれ門夫二人を配置する。守護を担当すべき者は、年十八以上の中男（唐代の法律によれば、十六才から二十才までの男性は「中男」と呼ばれる）及び障害者である。このような人々の現在人数にしたがって、平均に順番を作って、不公平にしないように徴発する。城門ごとにそれぞれ四人、倉庫門ごとにそれぞれ二人を配置する。（その倉庫で収蔵される糧食が一萬石増えれば、これに応じて倉門の門夫を一人増加し、しかし最大限五人を越えてはならない。）その京兆、河南府及び赤県（京城付近の県）の城門にそれぞれ六人、庫門にそれぞれ三人を配置する。（官庁を修理する者及び官庁事務を担当する者の使用については、一定の量を許す。当番しない代わりに、差役夫に代役錢を徴収するなら、一回ごとに閑月には一百七十文

を越えてはならない、忙月に二百文を越えてはならない。) 仕事が五十日を満了する者の中で、障害者の課調を免除し、中男の雑徭を免除する。その州県に居る戸数が差役の徴発に足らざれば、ほかの県から借りて徴発する。総称は門夫と謂う⁽¹⁾。唐代、門夫は色役(すなわち後代の差役に当たるものである)の一種に属する差役夫である。宋代の史料によれば、倉庫関係の差役夫は斗子、庫子、斗級などがあったが、しかし、徴発の方法はまだ分かっていない⁽²⁾。

元代、各地の倉庫にも庫子等の差役夫は配置されていたが、徴発制度の変化もあった。元代においては、庫子そのものはもともと一般民戸によって充当されていた。則ち「州県に戸籍と産業がある民戸の内から選んで徴発する」であった。しかし、倉庫の管理に対しては、一定の専門知識(特に計算など)が必要である。錢糧の出入はかなり頻繁であり、数量も多かったと考えられる。一般の民衆はみな錢穀書算をよく知らないで、欠損の問題を引き起こした。大徳三年(1299)から、一部の地方に「管轄する司(録事司) 県に資産を持ち、官庁に務めている

司吏の内から公正に徴発する」とある。つまりこれまで一般民戸によって充当されていた差役は、胥吏によって担当されるものになったのである。もし倉庫の管理を担当する胥吏は一年にわたって過失が無ければ、期限になると順番に知府衙門の胥吏あるいは典史を採用することができる⁽³⁾。陳高華氏は、それにもかかわらず、多数の地方に依然として一般民戸から庫子を徴発したと指摘している⁽⁴⁾。地方志のなかに斗級に関わる記事も記載されており、至順年間(1330-1332)、鎮江路に倉斗級十六名があり、それぞれ丹徒県における大軍倉と香糯倉に配置されている⁽⁵⁾。

明代は前代の制度を受け継いで、倉庫で具体的に職務を担当する差役夫として、倉に斗級を、庫に庫子を設置していた。明代初年に、朱元璋が編纂される『御制大誥』の中に斗級関係の記事が記載されている⁽⁶⁾。明代政府は斗級と庫子の定数について、どの規定を設けていたのだろうか。皂隸、馬夫などの差役項目について、明代中央政府は衙門のランクと官僚の品級に応じて、徴発の定数を規定し、たびたび定数以上

(1) 杜佑『通典』(北京、中華書局、1988年)、卷35、職官17、祿秩、967ページ

「諸州縣不設防人處、城及倉庫門各二人；須守護者、取年十八以上中男及殘疾、據見在數、均為番第、勿得偏併。每城門各四人、倉庫門各二人。(其倉門每萬石加一人、石數雖多、不得過五人。)其京兆、河南府及赤縣大門各六人、庫門各三人。(其須修理官廩及祗承官人、聽量配驅使。若番上不到應須徵課者、每番閑月不得過一百七十、忙月不得過二百文。)滿五旬者、殘疾免課調、中男免雜徭。其州縣城郭之下戸數不登者、通取於他縣。總謂之門夫。」

(2) 聶崇岐「宋役法述」、氏著『宋史叢考』(北京、中華書局、1980年)、上、2ページ

(3) 『大元聖政國朝典章』(臺北、文海出版社、1964年)、卷12、吏部六、吏制、213ページ

「一定差庫子事理。大徳三年(1299)、行中書省準中書省咨吏部呈順徳路申。本路祇應倉官廣盈庫子在前於司縣係籍有抵業下民戸内選取。為係莊農之家、錢穀

書算俱不過曉。其間収支糧斛、出入錢帛浩大、以致虧兌失陷。致將應有財產房舍孳畜等物盡行折剝。更當侵盜罪犯、至今消乏、深為未便。擬於所轄司縣有抵業見役請俸司吏內公選勾當、周歲如無失陷、粘帶於府吏並典史挨次収補。相應合準本路所擬。如蒙準呈、本部通行照會、一體施行。具呈照詳都省咨請依上施行。」

(4) 陳高華「元代役法簡論」、氏著『元史研究論稿』(北京、中華書局、1991年)、23-24ページ

(5) 『(至順)鎮江志』、卷13、公役、46aページ

(6) 『御制大誥』(南京、江蘇人民出版社、1988年)、納糧入水第五十二、234-235ページ

「納糧人戸及取糧倉官、斗級人等、身亡家破、皆自招也。且如大軍倉廩、每間不下萬餘石。良民務以乾圓潔淨上倉。姦頑無籍之民、但知利己圖利、不知所壞甚多。且如有納一千石者、通同倉官人等、入水上倉、比所納者、止是一千入於萬石之中、一蒸之後、滿廩盡壞。所納甚少、所壞甚多、天災人禍豈有不至者耶。」

徴発の禁止を強調している。また、明代中央政府は南北両京及び水次諸倉（漕運関係の倉庫）で働く斗級の配置に関わる規定を設けてはいる、しかし、筆者の知る限り、地方倉庫の斗級と庫子の定数については、統一的な標準がなかったようである。例えこのような規定があっても、皂隸の場合とは違って、しばしば定数を超える徴発の禁止を強調するようなことはなかった⁽⁷⁾。このため、我々は実際の状況から地方倉庫の斗級と庫子の定数を推定するより他しかたがない。地方志の史料によれば、各地における斗級の設置についても、定数がなかったようである。少ないところには倉ごとに一人あるいは二人を配置しており、江陰県の場合には、和豊倉斗級二名が配置されていた⁽⁸⁾。弘治年間（1488-1505）に編纂された地方志の記事によって、徽州府の休寧、婺源、祁門、黟県、績溪等県にそれぞれ「存留倉斗級」あるいは「県倉斗級」二名が配置されていたことが分かった⁽⁹⁾。ところで、倉ごとに数名の斗級を配置するケースもよく見られる。例えば、海寧県盈積倉斗級は嘉靖年間に四名があった⁽¹⁰⁾。また同じ嘉靖年間に、高淳県に「永豐倉斗級」四名、「俸給倉斗級」六名が配置されていた⁽¹¹⁾。斗級配置の標準については、今のところ、これ以外の史料は見いだされていない。嘉靖十七年（1548）、呉江県に濟農倉斗級を徴発する時に「約粟三千

石にあたり一名を配置する」という標準にしたがって、濟農倉に斗級十六名を配置していた⁽¹²⁾。嘉靖三十五年（1556）に、同県の濟農倉に斗級二名を配置していただけである⁽¹³⁾。

庫の状況も同じである。州県衙門における架閣庫と耳房庫には通常にそれぞれ庫子一名あるいは二名が配置されていた。南直隸呉江県の場合には、弘治年間に庫子五名が配置されていた。その内訳は「本縣西庫に二名、架閣庫に一名、儒学に二名」である⁽¹⁴⁾。同じように、弘治年間において、徽州府六県における庫子の配置状況は次のとおりである（表一）。

もしこの記事に間違いがないとすれば、架閣庫庫子はすべての県に配置されたわけではないと考えられる⁽¹⁵⁾。上述のように、架閣庫の主な業務は行政檔案の収蔵であり、一部地方の架閣庫は専任の吏典によって直接に管理された。このため、架閣庫に庫子を配置しなくても、架閣庫の管理に影響を与えることはなかったように思われる。

2) 斗級と庫子の徴発標準

差役夫である斗級と庫子は、一般民戸から徴発されているが、史料の制限があるので、徴発の基準はなおはっきり分かっていない。通常、斗級と庫子の徴発も次の基準によって行われている。則ち、「すべての賦役徴発は、必ず民衆

(7) 『(萬曆)大明會典』、卷21、戸部8、倉庾1、京倉、7a-bページ

(8) 『(嘉靖)江陰縣志』(上海、上海古籍書店、1981年、明嘉靖年間刻本影印)、卷5、食貨記上、徭役、30aページ

(9) 『(弘治)徽州府志』、卷3、食貨2、財賦、徭役、75a-76bページ

(10) 『(嘉靖)海寧縣志』、卷3、倉庫、4a-bページ

(11) 『(嘉靖)高淳縣志』(上海、上海古籍書店、1981年、明嘉靖年間刻本影印)、卷1、賦課、戸口、18b-20aページ

(12) 『(嘉靖)呉江縣志』、卷10、食貨志2、徭役、15bページ

「濟農倉斗級。約粟三千石編一名、見編十六名。」

(13) 『(嘉靖)呉江縣志』、卷10、食貨志2、徭役、24aページ

「濟農倉斗級。二名。」

(14) 『(弘治)呉江志』、卷3、職役、15bページ

「庫子。本縣西庫二名、架閣庫一名、儒学二名。」

(15) 『(弘治)徽州府志』、卷3、食貨2、財賦、徭役、75a-76bページ

(表一) 徽州府における庫子の配置

庫	単位、名						
	府	歙 県	休寧県	婺源県	祁門県	黟 県	績溪県
架閣庫庫子		2	2				
廩給庫庫子			1	1	1	1	1
県庫庫子				2			2
耳房庫庫子						2	
慶積儀杖庫	21						

の人丁と税糧の多寡、資産の厚薄を調べて、平均的に徴発する」という、朱元璋によって定められた原則である⁽¹⁶⁾。この原則に従うとともに、各地では戸等の具体情况を含めて、斗級と庫子の徴発を実施していた。明代成化年間（1465-1487）、福建では「それぞれ人丁と税糧によって各衙門の差使を担当させる」という徴発方法が取られていた。つまり「税糧一百石以下を納める民衆に、本府の庫役を担当させ、錢糧五十石以下を納める民衆に、儒学の膳夫を担当させ、錢糧十石以上を納める民衆に、藩（布政司）臬（按察司）臺府の皂隸あるいは儒学膳夫を担当させ、錢糧十石以下を納める民衆に、倉の斗級を担当させ、錢糧五石以下を納める民衆に、県の直廳皂隸、馬夫及び鋪兵、弓兵、儒学の司書、庫子、門子と巡檢弓兵、税課巡欄などの差役を担当させる」とある⁽¹⁷⁾。嘉靖年間、南直隸高淳県は県の差役を上中下三等に分けていた。倉

庫関係のものは次の通りである⁽¹⁸⁾。

上差 南京戸部鹽倉庫秤 2名
 南京光祿寺庫子 1名
 中差 本県預備倉斗級 10名
 本県永豐倉斗級 4名
 下差 本県庫子 4名
 本県俸給倉斗級 6名

上述のように福建と南直隸で行われていた徴発方法はいずれも「有力人戸」に、本地から遠く離れて、布政司あるいは府で働く差役を担当させるのである。ところで、差役を上中下三等に分ける情況については、明代の官僚李士翱は次のように述べているが、「州県で働くのは容易で、府と漕運の差役は難しく、三司（布政司、按察司、都指揮使司）で働くのはもっとも難い。おそらく本地の差役は、家においても担当でき、

(16) 『明太祖實録』（臺北、中央研究院歷史語言研究所、1962-1966年、國立北平圖書館紅格鈔本微捲影印）、卷163、洪武17年（1384）七月、2528ページ

「爾戸部其以朕意諭各府州縣官、凡賦役必驗民之丁糧多寡、産業厚薄、以均其力。」

(17) 『（嘉慶）浦城縣志』、卷8、戸口（唐文基『明代賦役制度史』261ページより）。

「民糧米自一百石以下者、僉本府庫役；錢糧五十石以下者、僉儒学膳夫；錢糧十石以上者、僉藩臬臺府皂隸、儒学膳夫；錢糧十石以下、僉倉斗級；錢糧五石以下、僉縣直廳皂隸、馬夫及鋪兵、弓兵、儒学司書、庫子、門子暨巡檢弓兵、税課巡欄等役。」

(18) 『（嘉靖）高淳縣志』、卷1、賦課、戸口、18b-20aページ

費用も少なく、耕作も妨害しないのである。府以上の差役は、費用が多く、正身（担当者本人）を提供するとともに、必要な人夫も雇わなければならない」とある⁽¹⁹⁾。李氏の話から、差役を上中下三等に分けるという状況に対する理解を深めることができる。上等人戸に庫子を担当させるケースもあった。萬曆年間、湖廣岳州府慈利県における永儲庫庫子などは、「上則人戸」から徴発されていた⁽²⁰⁾。呂坤は「均徭徴発」を議論する時に、かつて次のように述べている。もし一家は田糧四十石あるいは人丁四十丁を持てば、庫役または収頭（税糧徴収関係の差役夫で、いずれも重役）を担当すべきである⁽²¹⁾。一般的に考えれば、ほかの差役項目と同じように、明代中期以後、各地における倉庫関係の差役はほとんど「重役」（負担が重いもの）である。名義的には「相応人戸」で担当すべきといえども、しかし優免、朋充などさまざまな原因の影響で、実際担当者はほとんど一般民衆である。また、実際担当者という者が実際に倉庫で働く差役夫だけではなく、彼らに「工食銀」（差役の担当者がもらえる労賃のような金）を提供するために指定される民衆もときとして含まれている。

3) 明代中期以後の状況

明代中期以後、倉庫関係の差役徴発にはどん

な変化があったのか。これまでの研究では、次のことがすでに明らかにされている。一、明代中期以後、他の差役項目と同じように斗級、庫子など倉庫関係の差役項目も次第に銀納になった。しかし、斗級、庫子にとって倉庫を管理する責任と負担はかなり重い。このため、相当長い期間にわたって、斗級と庫子はともに「力差」つまり担当者本人が自ら働かなければならない差役であり続けた。二、各地の事情（差役を担当できる人口、田地）によって、差役負担の重さも異なる。このため、斗級と庫子の折銀標準も地方によって異なった⁽²²⁾。三、上述の二つの状況以外に、倉庫関係の差役を徴発する時に、次のような現象も存在していた。則ち、差役を徴発する時に、役夫の人数の代えて役銀若干両だけを徴収している場合もある。嘉靖四十五年（1566）四月、巡按浙江監察御史龐尚鵬は、杭州府には耳房庫庫子の徴発と使用中に弊害があるとみなし、「以前に府県で耳房庫子を徴発する時に、豊かな者四人を徴発し、差役を担当させていたが、差役夫に公私諸費を要求するので、破家する者がかなり多かった」と述べている。そこで、彼は、府県の耳房庫庫子を廃止することを建議した。則ち、「庫子の工食銀だけを徴収し、担当者を指定しない。それぞれ謹実な胥吏を選んで、彼に倉庫を管理させて、毎四半期ごとに交代させる」とある⁽²³⁾。このような改

(19) 李士翱「欽奉敕旨陳言民情疏」、陳子龍等編『皇明經世文編』（北京、中華書局、1962年、明天啓年間平露堂刻本影印）、巻209、3aページ

「在州縣者易當、在府運者難當、在三司者尤難當。蓋在下之差、居家應役、使用既少、且不妨耕。在上之差、使用浩大、既解正身、又要雇人。」

(20) 『（萬曆）慈利縣志』（上海、上海古籍書店、1981年、明嘉靖年間刻本影印）、巻9、職役、7bページ

(21) 呂坤『實政錄』（臺北、文史哲出版社、1971年、清嘉慶2年（1797）刻本影印）、巻4、治民之道、編審均徭、503ページ

「假如一品免田糧三十石、人三十丁、倘一品者有田糧四十石、人四十丁。則十石十丁之差、應坐庫役、應坐収頭。」

(22) 唐文基『明代賦役制度史』、明嘉靖年間各地主要均徭雜役折銀價格表、238-239ページ

(23) 『（萬曆）杭州府志』、巻7、國朝郡事紀下、20bページ

「夏四月、巡撫浙江監察御史龐尚鵬奏革杭州諸郡弊政。所革凡六事、今記其大者三。一革耳房庫子。先年、府縣編僉耳房庫子、擇家裕者四人充役、令給公私諸費、破家者頗多。以仁和言之、知縣於庫子分毫無染者、惟

(表二) 杭州府庫役銀

単位、両

県	祇應白米庫銀**	耳房庫子役銀***	耳房庫子閏月銀
仁和县		42.00	3.50
錢塘県		42.00	3.50
海寧県*	998.00	42.00	3.50
富陽県		36.00	3.00
餘杭県	260.00	36.00	3.00
臨安県	180.00	36.00	3.00
新城県	14.00	30.00	2.50
餘潛県	14.00	30.00	2.50
昌化県	14.00	30.00	2.50

* 海寧県にはまた庫役銀160両などを府の資盈庫に交付する義務がある。

** 交付先は武林駅である。

*** 交付先は本県である。

革は、差役を割り当てる時に、耳房庫庫子担当者指定しないままに庫子の工食銀数日だけを決定するものである。また、選ばれる胥吏は、この工食銀を用いて倉庫の運営を維持する。このような政策にしたがって、萬曆初年に、杭州府の各県が差役を割り当てる時に、「耳房庫子役銀」と「庫役銀」が現れている（表二）⁽²⁴⁾。

この時期において、こうした現象は浙江以外の地方にもあったようである。例えば、嘉靖の末頃、徽州府下の各県には、預備倉斗級若干名が徴発されていた⁽²⁵⁾。しかし、萬曆、泰昌（1620）年間になって、預備倉斗級という差役項目はすでに廃止され、代わりに、預備倉倉費

銀は府下の六県から徴収されるようになった。この預備倉倉費銀はあわせて二百五十五両六錢であった⁽²⁶⁾。

庫子の状況も同じである。嘉靖の末頃、徽州府下の六県では架閣庫庫子を徴発する時に、担当者の人数が定められないままに役銀だけを徴収していた。各県における架閣庫役銀の数字は次の通りである⁽²⁷⁾。

歙 県：85.26（両）

休寧県：85.26

婺源県：66.72

祁門県：50.728

〳南海李義壮、大理趙周二二人而已。尚鵬裁革、止編庫子工食、不坐姓名、各申呈選撥謹實吏管理、按季交盤更替。」

(24) 『(萬曆) 杭州府志』、卷31、征役、1a-70bページ

(25) 『(嘉靖) 徽州府志』、卷8、食貨、歳役、24a-38b

ページ

(26) 『(泰昌) 徽州府賦役全書』(臺北、学生書局、1970年、明泰昌元年(1620)刻本影印)、25bページ

(27) 『(嘉靖) 徽州府志』、卷8、食貨、歳役、24a-38bページ

夥 県：50.728

績溪県：50.728

同じ嘉靖末年、庫子、斗給、解戸、禁子などは民衆を害するので、担当者の募集がなかなか難しい状態が続いていた。海瑞は応天巡撫を務める時にも、斗級と庫子の徴発を廃止し、胥吏に倉庫事務を担当させた⁽²⁸⁾。

上述のように、明代中期以後、南方の一部地域に倉庫役銀（原来の工食銀など）だけを徴発する現象が現れた。これは、担当者を指定し、工食銀も徴収する方法であり、つまり役夫と工食銀をとともに徴発する方法とは異なるものであろう。このような方法の採用は、当時における徭役制度銀納化の潮流に関わるものと考えられる。徴収される工食銀は基本的に行政経費として使用されており、これらの「倉費銀」、「庫役銀」あるいは工食銀は胥吏によって管理されている。『（崇禎）嘉興縣志』に記載される史料は次のように述べている。「耳房庫役銀は四十二両である。耳房庫を管理する胥吏に交付し、庫を守衛する人を雇う。並に筆墨、油燭、查盤造冊（おそらく会計審査である）のための紙笥工食及び冬夏桌幃、坐褥等の費用として使用する」⁽²⁹⁾。ここで見られるように、この金は、胥吏によって管理されているものである。人を雇うか否か、何人を雇うか、どの行政管理事務用品

を買うか等の問題は、すべて胥吏によって決定される。このため、胥吏は倉庫の管理中に重要な役割を持っていた。したがって、庫子と斗級に交付すべき工食銀のなかに、ある種の労賃である一方で、倉庫日常運営のための費用も含まれていると思われる。

清代以後も、倉庫関係の差役はほとんど継続されていた。清代の規定によれば、各府州県に快手、皂隸、門卒、庫子などが設置され、皆定数にしたがって募集するとある⁽³⁰⁾。清代における庫子と斗級の定数に関する法律規定については、今のところまだ明らかにされていないが、地方志の中で実際の状況が伺える。康熙初年、嘉定県に庫子、斗級四名ずつが徴発され、年間工食銀はそれぞれ二十四両となっていた⁽³¹⁾。同じ時期に、湖南永州府零陵、東安、永明、新田四県にあわせて庫子十五名が配置されており、年間工食銀はあわせて九十両である。このほか、東安、永明、新田三県には斗級十一名を設置し、年間工食銀はあわせて六十六両である⁽³²⁾。清代末年、福建省建寧府浦城県にはなお庫子四名、斗級四名を徴発し、年間工食銀は清初と同じようにそれぞれ二十四両であった⁽³³⁾。これらの史料はそれぞれ清初と清末の、内陸と沿海の状況を記載している。これらの史料によって、次のことを知ることができる。つまり、清初または清末においても、各県に配置

(28) 顧炎武『天下郡國利病書』（四部叢刊三編本）、原編第六冊、蘇松、21a-22bページ

「……但丁田銀既輸于官、而庫子、斗給、解戸、禁子之類最為民禍者、終不可得募。復于該年摘撥而給其直、當時以爲陽革陰用、歲歲均徭也。三十六年、縣令楊公旦請復十年一審之舊、而王公儀所為精思遠慮以立宜民之法幾至寢廢而不行。後巡撫海忠介公瑞求民所苦、郡守蔡公國熙悉聞閭閻之隱、乃以吏守倉庫（吏守倉則罷斗給、吏守庫則罷庫子）、而解戸所應輸者上之府、府遣官類輸之京師。」

(29) 『（崇禎）嘉興縣志』、卷10、賦役、27aページ

「耳房庫役銀四十二兩。給管庫吏雇人守庫並辦筆墨、油燭、查盤造冊紙笥工食及冬夏桌幃、坐褥等費。」

(30) 『清史稿』、卷121、食貨志2、3544ページ

「其府州縣……又有快手、皂隸、門卒、庫子諸役、皆按額招募。」

(31) 『（康熙）嘉定縣志』、卷8、賦役下、56bページ

(32) 『（康熙）永州府志』、卷12、田賦志上、1a-55bページ；卷13、田賦志下、1a-61bページ

(33) 『（光緒）續修浦城縣志』（清光緒26年〔1900〕刻本）、卷10、經費、2aページ

される倉庫関係の差役夫の定数は庫子、斗級四名ずつであり、庫子あるいは斗級の工食銀は一名あたり年間銀六両であった⁽³⁴⁾。『度支津梁』の中に「福建各衙門役食」というものが記載されている。その中に、「馬快快手民壯庫子斗級禁卒に一名あたり年間に均閏銀（恐らく工食銀と閏月銀である）六両二錢を交付する」との規定がある⁽³⁵⁾。これは上述の地方志の史料とほぼ同じであると考えることができよう。

三. 斗級と庫子の職掌

前述のとおり、倉庫の管理と運営は、官である倉大使あるいは庫大使、及び吏である攢典あるいは典吏によって行われていた。彼らによる管理の下に、民衆から徴発される差役夫も倉庫で働き、実際の職務を担当していた。倉で働く差役夫は斗級で、庫で働く者は庫子である。

明清時代において、差役夫のなかで斗級と庫子の身分は比較的特殊なものであったと思われる。洪武年間に頒布された『大明律』の規定によれば、斗級と庫子は「監臨主守」に属するものである。「およそ監臨主守と称される者は、内外諸司の統轄に所属するものである。文案にかかわり、及び管轄されない百姓でも事務を管理するものは監臨である。主守と称されるものは、文案を管理すべき胥吏がそれを管理するの

である。倉庫獄囚雜物などを看守する官吏、庫子、斗級、攢欄、禁子も主守と呼ばれる。もとの職掌と関係なく、臨時に差遣され、事務を管領提調する者も監臨主守である」とある⁽³⁶⁾。『鼎鑄大明律例法司増補刑書據會』の解釈によれば、「監臨は職掌として管轄にあたる官員であり、あるいは臨時に差遣される管領提調の官員である。例えば、司府州県の正官はそれに所属する官員、胥吏、民衆に対して、また、守巡管糧清軍驛傳鹽馬屯捕の各參政參議副使僉事太僕苑馬少卿寺丞府同府判推官は管轄されるものに対して、都司は衛に対して、衛は所に対して、要するに官僚はそれぞれの僚属に対して、皆監臨である。主守は倉庫関係の官吏斗級庫子巡欄收頭糧長等役である」とある⁽³⁷⁾。彼らは倉庫管理の実務担当者であり、公務を遂行する時に相当の独立性を持っている。そのため、身分、あるいは責任の面において、彼らは官僚のために鞭を持ち鐙を降ろすといったような単純に官僚に驅使される皂隸と異なる点があると思われる⁽³⁸⁾。もちろん、もし問題が起きれば、かれらの責任も皂隸より重いである。

次に清代の倉庫管理制度について簡単に付言しておこう。清代においては、明代の倉庫管理制度がほとんどそのままに受け継がれているが、ところで、斗級と庫子の身分については、明代よりもっと明白に規定されている。明代、斗級

(34) 『(康熙)永州府志』、卷12、田賦志上、25a-bページ

(35) 『度支津梁』（臺北：學生書局、1986年、清代道光年間鈔本影印）、297ページ

「福建各衙門役食……馬快快手民壯庫子斗級禁卒、每名歲支均閏銀六兩二錢。」

(36) 『大明律』（瀋陽、遼瀋書社、1990年）、卷1、名例律、稱監臨主守、22ページ

「凡稱監臨主守者、内外諸司統攝所屬、有文案相關涉、及雖非所管百姓、但有事在手者、即爲監臨。称主守者、該管文案吏典專主掌其事、及守倉庫獄囚雜物之

類官吏、庫子、斗級、攢欄、禁子、並爲主守。其職雖非疏属、但臨時差遣、管領提調者、亦是監臨主守。」

(37) 彭應弼『鼎鑄大明律例法司増補刑書據會』（日本京都大学撮影明刻本）、卷4、私借錢糧、12b-13aページ

「監臨は職掌該管或臨時差遣管領提調官員、如司府州縣正官於所屬、及守巡管糧清軍驛傳鹽馬屯捕各參政參議副使僉事太僕苑馬少卿寺丞府同府判推官於所轄、有司如都司於衛、衛於所、各僚属皆是。主守是倉庫官吏斗級庫子巡欄收頭糧長等役是也。」

(38) 『御制大誥』、差使人越禮犯分第五十六、237ページ
「皂隸係是諸司衙門執鞭、總鐙、驅使勾攝公事之人。」

と庫子は「監臨主守」であり、一般の賤民である差役夫と異なる身分を持っていたが、清代になると、斗級と庫子は「賤役」ではないという規定が明確に設けられていた⁽³⁹⁾。

規定によれば、かれらは糧銀財物の収納、放出、保管の責任を負う。

1) 錢糧財物の収納と放出

錢糧を収納する時に、主管の官吏とともに、斗級と庫子はものを点收してから、規定にしたがって、納税者に自分の名前を署名した「通關」あるいは「硃鈔」を交付する。「通關」と「硃鈔」については、『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』の説明によれば、「錢糧を納めてから交付する印信長單は通關と謂い、倉庫で載收してから交付する硃批照票は硃鈔と謂う」とある⁽⁴⁰⁾。『臨民寶鏡』のなかに「通關式」が収録されている⁽⁴¹⁾。

某處為某事今將實收編置填給緣由合就給付執照

某字半印上幾號	某字半印下幾號
某處為為某事實收過某處某人物銀貨若干	
今半印號	右 通 關
某年全印某月	日給
某處押 司典吏某押	斗級庫子押
某年全印某月	日 某官某押
首領官某押	司典吏某押 庫子某押

もし規定に違反し、「通關」あるいは「硃鈔」を交付すれば、ただちに「監守自盜」の関係法律にしたがって罪を論罪する。「およそ倉庫で収められるすべての官に係わる錢糧などが不足し、しかし監臨主守は関係衙門の提調官吏とぐるになって、偽りの数字を書いた「通關」を交付する者があれば、その偽りの数字と他の贓を一緒に計算し、監守自盜の罪として処罰する。在庫の錢糧をあらためる時に、実際の数が不足しているにもかかわらず、数を満たしていると報告する官員があれば、罪は同じである。賄賂を受け取る者があれば、贓を計算し、枉法としてより厳しく処罰する。勝手に錢糧に代えて他の物をを収め、偽りの通關文書を発行する者に対しても、監守自盜の罪として処罰する。納戸は内情を知っている場合に、刺配（犯人の額に入れ墨して遠方に追放する）を免除し、贈賄の金を官府に上納する。知らない者は、罪に問われない。その贓品は元来の所有者に返す。犯罪の行為を知っても検挙しない同僚は、犯人と同じ罪に問われる。知らない者及び同じ文案に署名しない者は、罪に問われない」とある⁽⁴²⁾。この他、すでに収められた糧食はもし短缺があれば、担当の斗級も責任を負わなければならない。『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』のなかに次の事例が仮定されている。広東高州茂名県の主簿李房は糧倉を盤査し、米五石の短少を發

(39)『（嘉慶）大清會典』（清嘉慶23年〔1818〕刻本）卷11、4bページ

「凡衙門應役之人、除庫丁斗級民壯仍列於齊民、其皂隸馬快步快小馬禁卒門子弓兵件作糧差及巡捕營番役、皆為賤役。」

(40)舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』（日本京都大学撮影明萬曆43年〔1615〕刻本）卷3、戸律、倉庫、虛出通關硃鈔、67a-69aページ

「錢糧通完出給印信長單者謂之通關、倉庫載收與之硃批照票謂之硃鈔。」

(41)蘇茂相『臨民寶鏡』（日本京都大学撮影明崇禎5年

〔1632〕刻本）、卷首中、30bページ

(42)『大明律』、卷7、戸律4、倉庫、虛出通關硃鈔、67-68ページ

「凡倉庫收受一應係官錢糧等物不足、而監臨主守、通同有司提調官吏虛出通關者、計所虛出之數、併贓皆以監守自盜論。若委官盤點錢糧、數本不足符同申報足備者、罪亦如之。受財者、計贓以枉法從重論。其監守不收本色、折收財物、虛出通關者、亦以監守自盜論。納戸知情、減二等、免刺、原與之贓入官。不知者、不坐。其贓還主。同僚知而不舉者、與犯人同罪。不知、及不同署文案者、不坐。」

見したが、守倉斗級周心は銀三両を賄賂として李房に手渡し、結局、李房は「完足」（数を満たすこと）という偽りの申告を出した。この事件が明らかになり、周心は監守自盜官糧律にしたがって罪に問われたのであった⁽⁴³⁾。

斗級と庫子は倉庫保管の具體執行者として、上述のような「通關」あるいは「硃鈔」に署名する以外、一部の書類関係の事務もあった。海瑞はかつて以下の項目を挙げている⁽⁴⁴⁾。

「每四半期の末に、分守道倉庫錢糧簿を斗級に倒換させる。

每四半期の末に、本府存留預備儒学各倉米穀簿を斗級に倒換させる。

每四半期の末に、管糧廳倉庫錢糧簿を斗級に比較させる。」

「倒換」は新旧帳簿の交換で、「比較」は帳簿の関係記載を調べ合わせることである。これによって、差役の担当者は倉庫を保管しながら、一定の行政責任を負うはずと考えられる。

錢糧を収める時に、欺詐と侵蝕行為は法律で禁止されている。例えば、斗級は余分の米を見て、銀五両に相当する米十石を勝手に盗んだため、倉の書手は、斗級の侵蝕行為を告発した。審判の結果は、斗級は「監守自盜官糧四十貫以上」という法律にしたがって斬罪に問われた。しかしながら、彼の罪は雑泛（一般の罪）に係

わるもののため、改めて徒刑五年に問われた。さらに、この斗級は「無力民戸」（貧しい農民）であるから、徒罪の年限に照らして、駅站到發遣されたのである⁽⁴⁵⁾。

斗級と庫子は法律に従い、錢糧財物を収めるとともに、厳格に主管官吏の命令あるいは関係文書によって錢糧財物を放出する。「およそ各官庁は錢糧などを収支する時に、すでに文案と仕切り書がある。もし監臨主守が規定どおりに収支をせず、官用の名義で財物を流用すれば、贓を計算し、監守自盜の罪に準じて問われる。処罰はただ答刑百回、配流三千里で、入れ墨の刑罰を免除する。割り印を押した仕切り書を与えずに勝手に書類を出したり、あるいは仕切り書を提出しても帳面に記載しないままに支給したり、倉庫側が仕切り書を待たずに、あるいは仕切り書を奉じて、支給の物を帳面に付けないことがあれば、これらの行為に対し、罪は同じである。軍隊は出征や鎮守する時に、兵士軍馬は通過するところで、必要とする糧草について、明白の文案を作り、即時に支給し、支給した数を関係上司に報告する。この数は倉庫に保管される錢糧の総額から減らされ、勝手な支給の罪にはならない。この規定に違反する者に対し、答刑六十回の刑罰に問われる」とある⁽⁴⁶⁾。規定に従わない放出に対し、処罰がある。例えば、

(43) 舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷3、戸律、倉庫、虛出通關硃鈔、67a-69aページ

「（廣東高州茂名県）主簿李房承委盤糧、欠米五石、受得斗級周心銀三両、代伊申報完足、……（周心）依監守自盜官糧……四十貫以上律各斬、……納米贖罪。」

(44) 『海瑞集』（北京、中華書局、1962年）、上、興革條例、45-46ページ

(45) 舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷3、戸律、倉庫、多收稅糧斜面、61b-64aページ

「又在官斗級王未因見附餘米多、時王未不合欺侵十石、價值五両。被本倉今告書手馮申告赴軍門陳處、批行廣州府。……王未依監守自盜官糧四十貫以上律斬係

雜泛准徒五年。……王未俱民、各審無力。各照例……照徒年限、發驛擺站。」

(46) 『大明律』、卷7、戸律4、倉庫、那移出納、69ページ

「凡各衙門受支錢糧等物、已有文案勘合、若監臨主守不正收正支、那移出納、還充官用者、並計贓、准監守自盜論。罪止杖一百、流三千里、免刺。若不給半印勘合、擅出權帖；或給勘合、不立文案放支；及倉庫不候勘合；或已奉勘合、不附簿放支者、罪亦如之。其出征鎮守、軍馬經過去處、行糧草料、明立文案、即時應付、具數開申合干上司、准除、不在擅支之限。違者、杖六十。」

このような仮定される事例がある。ある県の庫子は匠作十名の工食銀五十両を放出したが、しかし、彼は勝手にこの工食銀から銀五両を使ってしまった。そして『大明律』の「守掌在官財物」という規定によれば、「人に官物を給付すべき場合に、倉庫から出しながら給付しない」者に対しては、ともに「監守自盜」の罪で罪を論ずる。これによって、この庫子は徒刑五年の刑罰を受け、ついに、納米贖罪した⁽⁴⁷⁾。

上司の命令に背く情況の下に、何らかの名義を借りて官に係わる錢糧財物を持ち出し、あるいは勝手に人に貸しだすことは固く禁じられていた。『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』のなかに次のような事例が仮定されている。斗級孫寅は自分の雜穀を用いて、倉庫に保存される白米二十石と交換し、また庫子李卯は庫内の圍屏と座布団を勝手に借用した。結局、斗級孫寅は「將自己物抵換官物者罪如主守將係官物私自借用」、庫子李卯は「將係官什物私自借用」の法律によって処罰された。李卯は納米贖罪され、孫寅は駅遞に発遣された⁽⁴⁸⁾。

清代になると、倉庫管理に関する法律のなかに、明代の規定とほぼ同じなものもあり、倉庫関係の職掌もあまり変わっていない。例えば、『福惠全書』には「六賊」（六種類の悪いこと）の第一項「監守盜」について、次のように説明している。つまり、「庫子、収頭、糧長らは錢糧を収める時に、錢糧を横領したり借りだした

りしていた。これは主守盜と考えられる」⁽⁴⁹⁾。このことから、庫子の職掌と責任は、明代と同様であったものと思われる。

2) 錢糧財物の保管

斗級の職掌は「存留」糧米、つまり中央あるいは他府県に運ぶ分以外の糧米の保管である。糧米の数量は地方によって異なる。例えば、成化十九年（1483）、吳江県の存留倉に収納されていた糧米は七千一百三十八石があり、濟農倉にも糧三十八万二百二十九石が収蔵されていた⁽⁵⁰⁾。

庫子は庫で働き、庫の種類によって行政檔案（架閣庫）または錢鈔、財物等（耳房庫等）を保管するものである。海瑞はかつて嘉靖末年淳安県耳房庫庫子に保管されていた財物を列挙している（海瑞の記録からみると、当時淳安県には架閣庫庫子が配置されていなかったようである）。

1. 兵器

鳥銃一百六把	藥方牙硝一両
□黄一錢四分	柳炭一錢八分
腰刀一十三把	新鎗三把
弓一十一張、箭一百支	麦尾鎗二把
木邊銃二把	鈹銃二把
舊銃二把	竹牌一十二面
鉄棍二根	月刀等件共一十八把
紙甲二十副	三門銃二把

(47) 舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷3、戸律、倉庫、守掌在官財物、88a-90bページ

「桂林府興安縣……在官庫子周心經放在官匠作吳尾等十名工食銀五十両、領出庫收藏、未捺各匠外。當周心不合侵銀五両使用訖。……依官物應當給付與人、已出庫而未給付、……計贓俱以監守自盜論四十貫以上律俱斬。惟係雜犯、准徒五年、……納米贖罪。」

(48) 舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷3、戸律、倉庫、私借官物、71a-73aページ

「……斗級孫寅將自己粗糧在倉換出白米二十石、庫

子李卯自將庫內圍屏坐褥借用。……孫寅依將自己物抵換官物者罪如主守將係官物私自借用者……計贓以監守自盜論俱四十貫以上律斬。……李卯依將係官什物私自借用……孫寅招詳本院照徒年限發驛擺站、……李卯……納米贖罪。」

(49) 黃六鴻『福惠全書』、卷20、刑名部、贓私、21bページ

「如庫子、収頭、糧長經收錢糧、欺侵借貸、俱為主守盜。」

(50) 『（弘治）吳江志』、卷4、官宇、9b-10aページ

五色旗共十一面 銅鑼二面
竹盃十個

上記の品目は恐らく知県に掌握され、地方治安を維持するための武器装備と考えられる。

2. 鋪陳四副

◎上鋪陳一副：

毛毯一條	紅氈一條
硬褥一條	軟褥一條
沿邊席一牀	錦被一牀
紅紵絲錦被一牀	白綾臥單一張
紅緞帳一頂	紅紗帳一頂
帳鉤一副	水裙一條
散鞋一雙	繡枕一箇
涼枕一箇	手巾一條

◎又上鋪陳一副：

毛毯一條	紅氈一條
硬褥一條	軟褥一條
蓆一牀	閃色紵絲被一牀
白綾臥單一牀	水裙一條
紅緞帳一頂	紅紗帳一頂
帳鉤一副	繡枕一箇
涼枕一箇	散鞋一雙

◎中鋪陳一副：

毛毯一條	硬褥一條
軟褥一條	蓆一牀
水裙一條	白綿布臥單一牀
涼枕一箇	紅絹幃一頂
紅紗帳一頂	繡枕一箇
帳鉤一副	散鞋一雙

◎又中鋪陳一副：

毛毯一條	硬褥一條
白綿布臥單一牀	舊硬褥一條
籐蓆二根	手巾三條
帳鉤一副	

規定によれば、「鋪陳」は往来する官員使客を接待するものである。

3. 県官堂上家伙

漆桌四張	川字圓椅一把（并坐褥）
小凳二十條	踏凳三條
考試桌三十三張	紅桌圍十箇
長桌八張	公座桌幃三副
長檠二箇	衣架一箇
竹屏風二箇	銅釘白牌六面
卷箱四箇	扛索三十七根
棕罩七箇	卷箱架二十副
鎗架二箇	收銀櫃二箇
長柄白牌八面	夾板四副
牙轎一乘	大櫃五箇
米櫃一箇	雨圍二副
絹幃一副	布幃一副
雨傘一把	黃涼傘二把
青涼傘二把	

このなかに各種類の家具、外出用の傘轎、取り調べのための刑具がある。その他、海瑞はまた硯などの文房具にも言及している⁽⁵¹⁾。

明代の法律によれば、斗級と庫子は輪番で倉庫管理にあたる規則になっていた。「倉庫、場務、獄囚、雑物などを管理する者が、もし当番をしなければ、あるいは宿泊しなければ、各々笞刑四十回を処罰する」とある⁽⁵²⁾。『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』の解釈では、「官庁で宿泊すべきあるいは当番すべき人は、官吏、旗軍、総甲、火夫、禁子、斗級、庫子など、およそ官庁で働く職役がある人たちである」とする。同じ史料のなかには、次の事例が仮定されている。「官庁で取り調べている斗級王斗は倉で当番すべきだったが、彼は錢糧のことを考えずに家に居り、倉を見守っていなかった」。そこで

(51) 『海瑞集』、上、興革條例、111-139ページ

(52) 『大明律』、卷2、吏律1、職制、31-32ページ

「若主守倉庫、場務、獄囚、雑物之類、應直不直、應宿不宿者、各笞四十。」

「主守倉應値不值者律」にしたがって、笞刑四十回が判決された。もっとも、王斗の家に『御製大誥』があるので、刑罰のランクを減らして、笞刑三十にして、併せて米を納めることで贖罪とした⁽⁵³⁾。

倉庫に盗難が発生する場合に、具体的な情況によって責任者の罪を処罰する。『大明律』に次の規定がある。「およそ人が倉庫から出てくる時に、当直者が搜索を行わなければ、かれに笞二十回の刑に処す。搜索を怠り、倉庫からの盗難を発見できなかった者に対し、盗罪より二等を減らし処罰する。夜番する者が盗難を発見できなければ、(盗罪より) 三等を減らし処罰する。盗みを働く者を発見できなかった倉庫の夜番する官擯、斗級、庫子に対しては、(盗罪より) 五等を減らし処罰する。各罪に対する処罰は併せてただ笞刑百までで止める。故意に犯人を逃がす者に対し、犯人と同罪で処罰する。被害者に対しては、罪に問わない」とある⁽⁵⁴⁾。例えば、ある仮定される史料によれば、軍人錢亢は倉庫口眼に入り、米二石を盗んだ。その時に、当番の斗級孫氏は寝ていて、夜番の斗級褚子は状況を知るにもかかわらず錢亢を逃がした。事件発生の後に、褚子は「倉守把之人不搜檢以致盜物出倉故縱者盜官物八十貫律」にしたがって絞刑に問われた。しかし雑泛に係わるので五

年の徒罪に改めて処罰した。孫氏は「有人從倉中出守把之人不搜檢以致盜物出倉而不覺者律」にしたがって笞刑百、徒刑三年に問われた⁽⁵⁵⁾。

ところで、監臨主守である斗級と庫子が盗難を行う場合には、別の規定が設けられている。「およそ監臨主守が自ら倉庫の錢糧などを盗めば、首犯あるいは従犯を問わずに、合計した贓物の額に応じて罪を論ずる」と⁽⁵⁶⁾。成化十八年(1482)二月、陝西武功左衛の餘丁楊海は、樂州の民人趙宋家の名をかたって、直隸永平府における大閘庫の庫子を務めていた。彼は、職権を乱用し、盧龍衛後所の軍人蘇雄と相談し倉庫中の絹を盗むことを計画した。十二月二十一日、二人は陳達、王鑑、夏林らを糾合し、永平府の永盈倉に向かった。「夜四更のころ、蘇雄等は各々倉の塀を越えて、陳達と王鑑は廩(倉庫)の屋根に登り、瓦を撤去し穴を開けて、王鑑は更にひもで陳達を廩のなかに降ろした。結局、彼らは官絹三十三疋を盗んだ。彼らは盗んだ絹を軍餘沈清の家に運び、沈清に盗みのことを言った。蘇雄と夏林は絹五疋ずつを取って、王鑑、陳達は絹六疋ずつを取って、楊海は絹一疋を取った」とある。この後、成化十九年三月十日、蘇雄は王鑑、陳達、夏林、王得、沈清と一緒に再び絹を盗んだ。彼らはその日の夕方のころに、倉の塀を越えて、巡夜している看倉斗

(53) 舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷2、吏律、職制、擅離職役、15b-18bページ

「在官應宿應直之人、指官吏、旗軍、總甲、火夫、禁子、斗級、庫子、凡有職役於官者皆是。……在官斗級王斗僉該在倉守值、不合不以錢糧為重、在家高坐、不行看守。……王斗依主守倉應直不直者律、笞四十。……有『御製大誥』、減等、……王斗笞三十、……納米贖罪。」

(54) 『大明律』、卷7、戸律4、倉庫、倉庫不覺被盜、70ページ

「凡有人從倉庫中出、守把之人不搜檢者、笞二十。因不搜檢、以致盜物出倉庫而不覺者、減盜罪二等。若夜直更之人、不覺盜者、減三等。倉庫直宿官擯、斗級、

庫子、不覺盜者、減五等、並罪止杖一百。故縱者、各與盜同罪。若被強盜者、無論。」

(55) 舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷3、戸律、倉庫、倉庫不覺被盜、76b-79aページ

「……軍人錢亢入倉庫口眼盜米二石、該班在官斗級孫氏不合頭覺被盜、在官直宿斗級褚子知情故放出門。……褚子依倉守把之人不搜檢以致盜物出倉故縱者盜官物八十貫律絞、係雜泛准徒五年。孫氏依有人從倉中出守把之人不搜檢以致盜物出倉而不覺者律杖一百、徒三年。」

(56) 『大明律』卷18、刑律1、盜賊、監守自盜倉庫錢糧、136-137ページ

「凡監臨主守自盜倉庫錢糧等物、不分首從、併贓論罪。」

級劉源に遭遇した。蘇雄は劉源に密かに言いふらしてはいけなと告げ、更に、もし協力すれば、盗んだ物をあなたの分も用意すると勧誘した。劉源は蘇雄の要請に応じて外で見張り、蘇雄らは前と同じ方法で政府の絹三十九疋を盗んだ。蘇雄と夏林、王鑑、陳達、沈清は各々絹七疋を、王得は三疋を取って、劉源は一疋取った。この後、彼らはまた同じ方法で政府の絹四十八疋を盗んだ。事件が明らかになって、斗級劉源は「常人盜倉庫錢糧不分首從併贓論罪八十貫律」にしたがって絞刑に問われ、他人の名をかたった庫子楊海は「倉庫雇役之人侵欺係官錢糧役監守自盜論四十貫律」にしたがって斬刑に問われた⁽⁵⁷⁾。さらし首にして大衆に見せるケースもあった。成化二十年（1484）十二月、江西南安府推官韓統は南康県で折糧銀兩と贓罰銀を追徴

し、あわせて銀四千余兩を得て、一時に南康県庫に保存させていた。この倉庫のなかにまた、贓罰銀五百兩、銅錢二串、及び色々な紵絲紗羅の衣服も保存されていた。吉安府萬安縣二都の民人羅仲経等はこれらの物品の強奪を企み、二十六日深夜、羅仲経は三十余人を集めて、県丞衙署の塀に穴を開けて、倉庫のドアを開き、この四千余兩の折糧銀と贓罰銀を盗んだ。ちょうどこの時、庫子鄧建緒、鄧建鸞は機会に乗じて、別に置かれる五百兩の贓罰銀などを盗んだ。翌日、鄧建緒は被害について上司に虚偽の報告を行ったが、調査を通じて事件の真相が解明した後、関係各犯は「法律にしたがって処刑され、さらに、その首を南康県に送って大衆に見せる」ことになった。ところで、処刑の前に鄧建緒は獄で病死し、上記の処罰を免れた⁽⁵⁸⁾。

(57)『皇明條法事類纂』上卷（東京、古典研究会、1966年）、卷32、偷盜邊境倉庫糧百石銀五十兩絹布一百疋棉花一百斤以上者俱問發充軍不及糧數併流罪以下照常發落例、796-797ページ

「成化二十年（1484）正月二十九日刑部尚書張 等題為訴知盜情（情）受要銀兩事。……成化十八年二月内、有武功左衛逃來餘丁楊海頂替深州民人趙宋名字充當本府大閘庫庫子。本年十月内、有本府將不収各處官絹九百餘疋収在永盈倉壬子廩内寄収。本年十二月内、（蘇）雄與舍人陳達、王鑑、楊海、軍人夏林各不合商議偷盜。本月二十一日夜晚四更時分、雄等各越過倉墻、令陳達、王鑑上廩拆去瓦椽開孔、王鑑用繩將陳達繫下、偷去官絹三十三疋。拿至庫餘沈清家内、說知偷盜情由、雄與夏林各分絹五疋、王鑑、陳達各分絹六疋、楊洪（海）分絹一疋、各散。成化十九年三月十日、雄又同王鑑、陳達、夏林前去糾合餘丁王得、窩主沈清各不合於本日黃昏時分、越過倉墻、過（過）見看倉斗級劉源在彼巡更。雄與密說、不要聲言、我每同盜、與你分用。劉源亦不合依允把風。照前盜出官絹三十九疋。雄與夏林、王鑑、陳達、沈清各分七疋、王得分絹三疋、劉源分絹一疋、各散。本年四月二十一日、雄與王鑑、夏林、陳達又到沈清家取齊、仍越倉墻、照前盜出官絹四十八疋、……蘇雄、王鑑、夏林、沈清、劉源俱犯該常人盜倉庫錢糧不分首從併贓論罪八十貫律絞、楊海依倉庫雇役之人侵欺係官錢糧役監守自盜論四十貫律斬。……照依前項議奏充軍事例、連當房家小各發邊衛充軍。」

(58)『皇明條法事類纂』下卷、卷33、強盜係干城池衙門

殺官劫庫劫獄並百人以上不分會否下手備人隨即奏請處作梟首示衆、29-31ページ

「成化二十一年（1485）九月十四日、都察院右都御史屠 等題該巡撫江西右僉都御史閔 奏、據江西按察司呈問得犯人羅仲経招係吉安府萬安縣二都民、先又本縣未獲賊人楊繼承、唐振綱、陳孔昭與賊人畢克文、阮彥輝俱逃在南康縣地方潛住、未獲賊人曾崇仁、曹宗榮、泰和縣施彥深亦合逃在贛州府城內潛住。成化二十年（1484）十二月内、南安府推官韓統在南康縣追收折糧銀兩與本縣贓罰銀共四千餘兩、俱収在庫。又有贓罰銀五百兩、銅錢二串、各色紵絲紗羅衣服另在櫃内収貯。彼有錢（楊？）繼承、唐糧（振？）綱、陳孔昭、畢克文、未獲義男葉伸和、阮彥輝、繼男陳福灵要行取劫。本年十一月十六日、俱到贛州城內遇見曾崇仁、曹宗榮、施彥深並廬陵縣今在官周雪賢、謀同說劫。曹宗仁等不合聽允、本月十七日分頭糾合傳伸金並羅仲旭等三十餘人。各不合於本月二十六日晚到南康縣楊江口取齊。本夜二更時分、各執鎗棍鉏頭等件、齊到南康縣後、將縣丞空衙後墻用鉏頭開通一孔進入、一齊吶喊、打開庫門、將前折銀並贓罰銀兩抬出。彼有庫子鄧建緒與鄧建鸞等各不合乘機亦將在庫另櫃収貯贓罰銀五百兩並銅錢衣服等物俱侵盜入己。伸金等抬到地名南山嶺、將銀物各分去。天明、鄧建緒不合將自己侵盜情由隱下、止將被劫緣由具本縣轉申。本府諸觀（官）親詣南康縣看得縣墻缺内外俱有鉏蹟、疑是庫子鄧建緒等構人侵盜。蒙拘鄧建緒等追審問。蒙成化二十一年正月初七日赦宥。有鄧建緒等各不合不行首官改正。續蒙本司備將查看過被劫

このほか、斗級と庫子によって保管される物に、盗難以外の紛失損壊が発生すれば、斗級と庫子は責任者の一人として、処罰を受けなければならない。実際に、斗級と庫子に賠償させる事例が多く記録されていた。『大明律』のなかに次のように規定されている。「およそ倉庫及び財物を集めるところ、規定どおりの保管措置を取らず、ものを干して乾かすことに時期を逸し、ものを破損することに至る者に対し、破損するものを計算し贓に問い、罪を論ずる。そして、賠償させる。もし突然に雨や火事にみまわれ、あるいは強盗事件があり、とにかく測られないことで損失があれば、官員に実況調査を依頼し明らかにした場合には、罪を免除し賠償もさせない。監臨主首が欺詐、借貸、流用する金を隠すために、水火事故と盗賊事件に乘じ、文案を作り、関係書類と帳面を勝手に差し押さえ、あるいは交換し、官府に偽りの申告を出すことがあれば、贓を計算し監守自盗の罪に問われる。同僚の実況を知って検挙しない者は同じ罪に問われる。知らない者は罪に問わない」とある⁽⁵⁹⁾。『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』という書物のなかに次の事例が仮定されている。四川順慶府南充県の庫子呉巳は官物に対し用心

せず、銀三両に相当する硃盒筆架一副を紛失した。そこで「遺失官物減毀人物三等」の規定にしたがって、笞杖四十回に問われた。しかし、呉巳は「有力民人」であったので、処罰は納米贖罪に変わった⁽⁶⁰⁾。成化十三年（1481）六月二十日、戸部尚書楊鼎は次のことを上奏している。福州府長豊倉の攢典斗級李顯等は、糧米を収める時に、倉庫の地面に敷かなかった。倉庫を封鎖した後に、空気孔の修理をせず、糧米の篩晒もせず、糧米の種類も区分しないままに保存していた。そのため、湿気と熱さによって、糧米は変質してしまった。この失職行為に対する処罰は、変質糧米の数量にしたがって追徴させ、終わってからただちに釈放させると決定された⁽⁶¹⁾。また、庫子は錢糧簿冊一冊を紛失し、「主守官物遺失簿書以致錢糧數目錯亂者律」にしたがって、笞刑七十回の刑罰に問われた⁽⁶²⁾。

一方、錢糧の安全を守るためには、『大明律』のなかに「錢糧互相覺察」という特別措置が設けられている。「およそ倉庫、務、場で働く官吏、攢欄、庫子、斗級は、皆互いに監視する。もし官府の錢糧を欺詐したり、盗んだり、貸し出したりして、既に倉庫から物を出したことを検挙せず、故意に犯人を逃かす者があれば、犯

↘縁由呈蒙鎮巡衙門、奏奉都察院勘合行仰都布按三司轉行湖西嶺北二道設法緝獲間、鄧建道（緒）在監病故、相埋訖。……合無將羅仲經情罪轉詳、合律就便奏請處作、仍照殺傷人命事例梟首示衆。」

(59)『大明律』、卷7、戸律4、倉庫、損壞倉庫財物、72ページ

「凡倉庫及積聚財物、主守之人安置不如法、晒晾不以時、致有損壞者、計所損壞之物、坐贓論。着落均賠還官。若卒遇雨水衝激、失火延燒、盜賊劫奪、事出不測而有損失者、委官保勘覆實、顯贖明白、免罪不賠。其監臨主首若將欺侵、借貸、那移之數、乘其水火盜賊、虛捏文案、及扣換交單籍冊、申保贖官者、並計贓以監守自盜論。同僚知而不舉者、與同罪。不知者不坐。」

(60)舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷3、戸律、田宅、棄毀器物稼穡等、33b-37aページ

「在官庫子呉巳不合不以官物為重、遺失硃盒筆架一

副、值銀三錢。……依遺失官物減毀人物三等……笞四十、……各納米贖罪。」

(61)『皇明條法事類纂』上卷、卷16、監追虧折倉糧例、436-437ページ

「成化十三年（1477）六月二十日、戸部尚書楊 等題為修德政以弭災異事。……福州府等長豊等倉攢典斗級李顯等……收受糧米之時、失於鋪墊廩底。封閉倉廩之後、不曾修整氣樓、或不督令如法篩晒、任從一概混收在倉、濕熱相蒸、因而沍滯虧折。……將見監犯人李顯等各人名下該追糧米作急照數追完、徑自釋放。」

(62)舒化『新刻御頒新例三臺明律招判正宗』、卷2、吏律、公式、棄毀印信制書、31b-34bページ

「在官庫子陳癸不合遺失錢糧簿冊一扇、……依主守官物遺失簿書以致錢糧數目錯亂者律、……杖七十、……納米贖罪。」

人と同じ罪に問われる。発見しない者に対し、三等を減らし、刑罰はただ笞刑百回である。もし官吏が偽りの文案を作り、物を横領したり、「通関」を出したりしても、その斗級、庫子、欄頭が、これを知らなければ処罰を与えない」とある⁽⁶³⁾。実際に、倉庫の関係者たちは共謀して、私利を営み、不正行為を犯すこともしばしば見られた。例えば、成化二十二年（1486）三月十六日、都察院右都御史屠滸は上奏して、陝西慶陽府寧州知州臧世清を糾弾している。臧

世清は成化二十年正月から二十二年三月までの間、庫子張伯宗等と共同して、在庫の官糧三千石以上を盗んで、勝手に使ってしまった。そこで皇帝の聖旨を奉じて、贓物を追徴した後、臧世清を陝西鎮夷千戸所に発遣させ、張伯宗を山西大同左衛に充軍させるとの判決が下された⁽⁶⁴⁾。崇禎六年（1638）十一月二十一日、祁彪佳は皇帝に華亭県の丁憂知縣羅明祖を糾弾したが、罪の一つは、倉吏朱允誼が積穀銀九百両を横領したのを放任していたことであった⁽⁶⁵⁾。

(63) 『大明律』、卷7、戸律4、倉庫、錢糧互相覺察、70ページ

「凡倉庫務場官吏、攢欄、庫子、斗級、皆得互相覺察。若知侵欺、盜用、借貸係官錢糧已出倉庫、匿而不舉及故縱者、與犯人同罪。失覺察者、減三等、罪止杖一百。若官吏虛立文案、那移出納及虛出通關、其斗級、庫子、欄頭不知者不坐。」

(64) 『皇明條法事類纂』上卷、卷32、侵盜賑濟銀百兩以

上糧百石以上奏請處置不及者常例發落、798-799ページ

(65) 祁彪佳『祁彪佳文稿・宜焚全稿』（北京、書目文獻出版社、1990年、據鈔本影印）、卷3、題為循例糾劾不職有司以備考察事、132-135ページ

「巡撫蘇松等處監察御史臣祁 謹題為循例糾劾不職有司以備考察事。……華亭縣丁憂知縣羅明祖……縱倉吏朱允誼侵費積穀銀九百兩。」